よびごえ

因速寺機関誌

臨時増刊号

谷川俊太郎さんの詩「ありがとう」はいい。

「空　ありがとう　今日も私の上にいてくれて
**　曇っていても分かるよ　宇宙へと青くひろ**
がっているのが／花　ありがとう　今日も咲
いていてくれて　明日は散ってしまうかもし
れない　でも匂いも色ももう私の一部／お母
さん　ありがとう　私を生んでくれて　口出
すのは照れくさいから　一度きりしか言わな
いけれど／でも誰だろう　何だろう　私に私
をくれたのは？　限りない世界に向かって私
は呟く　私　ありがとう」。永代経法要では見谷さんが朗読してくれた。文字は詩ではないとわかった。その文字が、誰かの口を通して読まれたとき、はじめて言葉が詩となって広がっていく。そして誰かのこころに受け止められたとき、詩が感動へと変化する。この詩を声に出して読んでほしい。そして読み進めて終わりの「私　ありがとう」に達したとき、私のこころに何が生れるのかを見つめてほしい。

●皆さんにも募集した一行詩「生きていることそれは」に私はこう続けた。「〈無意味〉に絶望し〈無・意味〉に救われること」と。ライブトークでそれを取り上げてくれた。谷川さんは「私が考えていることとこの詩は近いです」と。やはり信仰も詩も〈ほんとう〉にかしづくものは、同じ匂いを発するのだろう。

〈結婚〉は犯罪である

武田　釋定光（住職）

■肉食妻帯の宗教■

これが浄土真宗の特徴だといわれる。ごく普通の市民生活を送ることが、私たちの宗風になっている。家には「家風」があるように、宗派にも宗派の家風がある。もともとお坊さんは「出家」だから、独身生活が前提になってきた。ところが浄土真宗だけは、肉食妻帯が宗風とされてきた。結婚はもちろん、肉食もする。それなので、「どこが一般人と違うのか？」と問われもする。そう質問するひとの頭の中には、「お坊さんは凡人では困る、聖人であってほしい」という淡い願望が潜んでいるのだ。

その質問に、私はこう答える。「俗人のあんたと違ったら困るだろ。煩悩で汚れきった俺たちでも救われる証拠を見せるためじゃよ」と。それはある種の居直りだ。そうそう胸を張っていえることではない。恥ずかしながら、ためらいながら、ただ、そうしているだけなのだ。

■親鸞の結婚■

肉食妻帯は親鸞から出発する。伝説では、法然に結婚を勧められ、しぶしぶ結婚したというのだ。この「渋々（しぶしぶ）」というのがミソなのだ。「浄土真宗の門徒は必ず結婚すべし、これこそが信者の模範だ」と親鸞は一言もいってはいない。ただ「赤山明神」の伝説がおもしろい。

若き親鸞が、京都市内から比叡山へ戻ろうとしたとき、ひとりの女が近寄ってきて、「私もお山へ連れてって？」とせがむ。親鸞は「それは無理。だってここは女人禁制の山だから」と応える。女はこう続ける。「それはおかしいじゃないかい。お釈迦様は、すべての人が救われる教えを説いたんじゃないの？男は救われて、女は地獄行きってこと？」と。それを聞いた親鸞はギョッとする。女はさらに追い打ちをかける。「じゃあ聞くけど、この山にはメスの猪とかメスの鹿はいないの？動物のメスはよくて、人間のメスは入ってはいけないの？それは差別じゃないの！」と。親鸞はもうノックアウト寸前だったに違いない。

この伝説の核心は、「平等の救い」はどこで成り立つかということだ。もうひとつ別のエピソードがある。それは「信心一異」の諍論といわれる。法然の学校での話だ。

新参の親鸞が、先輩たちの前で、「僕の信心と先生（法然）の信心は同じです！」と言い放った。先輩たちは色めき立って、「なにを若造が！お前のような駆け出しと崇高な法然上人様の信心が同じはずがなかろう！」と豪語した。親鸞は「いやいや、記憶力や判断力などの知力が同じといってるんじゃないんです。ただ信心は同じだといってるだけなんです」と弁解した。それでも先輩たちの怒りは収まらず、先生に決着をつけてもらおうということになった。

法然「何を騒いでおるのじゃ。見苦しいぞよ」。

先輩たち「いやね、こいつ（親鸞）が、先生の信心と自分の信心が同じだと言い張るもんですから、こらしめてやろうと思いましてね」。

法然「勘違いしちゃ困りますよ。弟子の親鸞の信心も如来様からのプレゼント。私の信心も如来様からのプレゼント、だから同じものですよ。なにか問題でもありますか」

先輩たちは、口をあんぐりと、その場に立ちすくんでしまった。このエピソードは浄土真宗にしか伝承されていない。むべなるかな。

ここでも親鸞が問題にしているのは、「平等の救い」はどこで成り立つかである。

経験や人間性や知力や体力などとは無関係のところに「救い」が成り立たなければ、「平等の救い」はないのだと直感している。

いくら親鸞でも、先輩方のなかで、こういう問答を吹っ掛ければ、どれほどの反発を受けるか想像はついていたと思う。その反発を食らったとしても、それでも敢えて、こういう問題提起をせざるを得なくさせたものはなにか。

これは親鸞の一世一代のスタンドプレーではなかったか。もし法然が、「お前のような駆け出しの弟子と私の信心が同じはずがあろうか！」と返答していたら、親鸞は法然のもとを去っていたに違いない。それほどのいのちが掛かった問いだったのだ。そうすると、親鸞にとって、結婚も信仰も同じ文脈の中にあったことになるのではないか。

■結婚三箇条■

私は仲人を三回ほど経験した。そのとき新郎新婦に三つのはなむけの言葉をプレゼントする。

①結婚とは別れを約束する儀式である。

②結婚とは犯罪である。

③結婚とは、過去形で語ることを許さない何かである。

①私が参列する式は「仏前結婚式」である。阿弥陀如来の尊前で結婚を誓うのだ。阿弥陀さんは別名「〈ほんとう〉」である。一般的な結婚式では、「分かれる、切れる」などの言葉はタブーとされている。だから、これはとても不謹慎な言葉なのだ。しかし、不謹慎といえば、阿弥陀さんほど不謹慎な方はいない。不謹慎が突っ立っているのが阿弥陀さんの立像ではないか。

人間の願いとしては、「末永くお幸せに」である。それも大事だが、もっと大事なことがある。それは「出会いは別れの原因」ということだ。結婚だけでない。ひとの出会いは必ず別れが約束されている。夫婦・親子・兄弟・友人・知人、あらゆる出会いには、一度は別れが約束されている。そのことを忘れてはならない。〈ほんとう〉のことは耳に痛い。しかし〈ほんとう〉のことだけが、ひとを心底支えるのだ。

②結婚は法律上の犯罪ではない。しかし信仰上の犯罪である。親鸞が結婚を決意したとされる夢の告げには「犯」という文字が記されている。つまり、結婚とは、しなくてもよい苦労や苦しみを相手に押しつけることになる。それは「犯す」という意味だ。これは男が女に、また女が男に対してだ。だから、必ず相手に対して加害の立場に立つ。人間に優しさが生れる背景には必ず加害者の自覚がある。自分が被害者だと感じたとき、ひとは残酷非道なテロリストに変身してしまう。この加害者の救いをこそ親鸞は、阿闍世に投影したのではないか。

③はなむけの言葉は、すでに結婚生活をしてきた人間が、まだ結婚していない新しい夫婦に何事かのものを申すのだ。しかし果たして、私は「結婚をした」と過去形で語ることができようかと思い至った。

いかにも結婚とは何かがわかったような顔をして、何をいえるだろうか。そう気付いたとき、私はまだ結婚していなかったのだと直感した。なぜなら、「結婚とは何か」をいまだに探し求めているからだ。なぜ結婚するのか?その問いの答えがまだ見出せないでいる。いやいや、答えはたくさんある。しかし、どのように答えたとしても、それは答えにはならない。それでは「結婚しつつある」といえるのか。それも嘘のような気がする。いつでも、どの段階を切り取ってみても、「未だ結婚していない」という地平にしか立てない。親鸞の結婚も、そうだったことだろう。

★因速寺　行事案内★

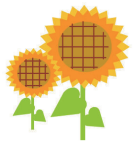
◇ご命日の集い◇

●毎月　日曜日 午後二時～四時●

開催日：六月三十日・七月二十八日・八月二十五日
九月二十九日・十月二十七日【兼 報恩講】

内　容：読経（焼香）＋法話（住職）

研修冥加金：五〇〇円（十月は三〇〇〇円）



◆写経の会◆

毎月 水曜日 午後一時三〇分～三時

開催日：七月二十四日・八月二十一日・九月十八日
十月二十三日・十一月二十日

教　材：正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経

研修冥加金：初回は三千円（教材費込）次回から五百円

♪六組聞法会♪

「親鸞聖人に学ぶ　真宗門徒の生き方」

開催日：八月三日（土）午後二時～

講　師：塩谷　菊美先生（神奈川県茅ヶ崎高等学校教諭）

会　場：因速寺（本堂）

主　催：真宗大谷派東京六組

研修冥加金：一〇〇〇円

【News】

☆次号は「よびごえ」１００号記念!!

因速寺機関誌「よびごえ」が昭和 61 年からスタートして約 30 年！次号で記念すべき 100 号になります。これを記念号として 10 月の報恩講【親鸞まつり】で発刊したいと思っています。今後とも因速寺をよろしくお願い致します。

★ご協力ください★

「よびごえ」バックナンバーを探しています

欠番〈９号・12 号・17 号〉

もしお持ちの方がおられましたらお寺にご連絡ください。
ご協力のほどよろしくお願い致します。　（担当：本多）

東京新聞「心のページ」で住職執筆!!

８月 17･24 日の土曜日朝刊「心のページ」欄に住職が執筆します。また中日新聞、北陸中日新聞にも「人生のページ」欄として同時掲載です。土曜の朝、コーヒー片手にホッとしませんか？

〈因速寺護法会費のご報告〉
平成 24 年度決算及び平成 25 年度予算

平成25年４月１日現在

	総収入 *前年度繰越金を含む	総支出	次年度へ繰越
平成24年度決算	15,762,452	10,924,218	4,838,234
平成25年度予算	16,488,234	14,100,000	(2,388,234)

＊詳細はお寺の掲示板に張り出しています

雑言雑語

次号は記念すべき「よびごえ」百号です！因速寺で学んだ貴重な経験を、実家に帰っても活かしたいです！私の中で「お寺って何だろう？僧侶って何だろう？」という思いが次第に不安に変わり、どうすれば良いのかと理想を追い求めてしまいます。しかし、どうやら仏様は私の理想を棄てさせようと働きかけていることが分かりました。自分の思いと仏法が衝突しあう不思議な感覚です。今の歩みを止めることなく、これからも師の言葉に尋ねていきたいと思います！

（釋　龍徳）

表紙　武田美輪（坊守）

「朴（ほお）の花」

『よびごえ』臨時増刊号
発行所　因速寺（真宗大谷派・本山 東本願寺）
〒136-0074 東京都江東区東砂１の４の１０
℡(03)3644-0986　FAX(03)3648-4391
Email　insokuji@at.wakwak.com
編集／発行　武田　定光　Takeda Jyoko
発行日２０１３（平成二五）年六月二十四日
Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan